わたしは主を見ました

――マグダラのマリアの物語

ヨハネによる福音書　２０：１－１８

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 7 月 21 日

聖霊降臨後第 9 主日

聖光教会にて

明日 7 月 22 日は「マグダラの聖マリヤ日」です。それで今日はマグダラのマリアのお話をすることにします。復活されたイエスに最初に出会ったのはマグダラのマリアでした。

マグダラはガリラヤ湖の西岸の町。そこの出身なので「マグダラのマリア」と呼ばれます。彼女はどういう人だったのでしょうか。

かつてマグダラのマリアは、重い病に苦しんでいました。その苦しみは体だけではなく、むしろ心のほうにあったようです。自分の中に自分ではどうすることもできない何かが取りついていて、それがいつも自分を抑えつけている。それはもう「悪霊」としか言いようのないもので、しばしば勝手に自分の中で暴れ出し、手の付けられないような状態になるのです。自分の魂は押しつぶされたようになって、恐れ、憎しみ、怒り、絶望から、自分と人を傷つけるような言葉や行動が起こってしまいます。

たくさんの医者にもかかり、占いやまじないをする人たちの所にも連れて行かれましたが、少しもよくなりませんでした。死のうとして死ぬこともできず、自分を責めて、自分を呪って、この世を憎みました。神に救いを切に求める自分があるかと思えば、自分を救うことのできない神を呪うことさえありました。神はこのような自分を罰するに違いない、と思っていました。

あの人は**「七つの悪霊に取り憑かれている」**（ルカ 8:2、マル

コ 16:9）と世間では言っているようでしたが、自分でもそう思っていました。

ところがある時、イエスという人と出会いました。イエスの話を聞いていると、これまで思ってきたような神とは違う、自分を責めるのではなく肯定し受け入れてくれる確かな存在であるように感じました。もう他に自分が行くところはない。このイエスについて行こうと決心しました。このイエスについて行って、生きるなら生きる、死ぬなら死ぬ、と決めたのです。

イエスに従って歩むうちに、荒れ狂っていた自分は少しずつおさまって、反対にこれまで経験したことのない平安と慰めを感じて、生きる力が与えられるようになっていきました。

イエスとの出会いによって、イエスの言葉、イエスの祈りによって、そしてイエスを中心とする交わりによって、彼女は癒やされた。あの「七つの悪霊」は追放されたのです。

彼女は他の人と一緒に、イエスの一行のために祈り、働きました。神の国を伝えて生きるイエスの働きに加わりました。自分は生きていてよかった。自分もまた人の力になることができる、と感じることはこのうえない喜びでした。

けれどもそれから2年も経つか経たない頃です。彼女の唯一の希望、慰め、救いであるそのイエスが、不当にも捕らえられ、

十字架につけられました。彼女は、他の女の人たちとともにずっと十字架のそばにいて、イエスを見つめて立っていました（ヨハネ 19:25）。イエスの仲間と見られてもかまわない。イエスは絶対に間違ってはいない。この世の悪しき力が、権力が、神から来られた方を殺した。悲しみと怒りで彼女の心は破れてしまいそうでした。

日が傾いた頃、アリマタヤのヨセフが来て、イエスの体を十字架から降ろし、墓に葬りました。墓の入り口には大きな石が転がされて穴を塞ぎました。マグダラのマリアは、ずっとその様子を見つめていました。人々が帰って行った後も、彼女はもう一人のマリアとともにそこに残り、墓の方を向いて座っていました（マタイ 27:61）。夕闇が次第に濃くなってきます。

3 日目、週の初めの日曜日の朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアはイエスの墓に行きました。そして、墓から石が取りのけてあるのを見ました。そしてイエスのご遺体がなくなっているのを知ったのです。彼女は走って、ペテロともう一人の弟子のところに行って言いました。

「誰かが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。」ヨハネ 20:2（聖書協会共同訳）

ペテロともう一人の弟子は急いで墓に来て、イエスの体はなくて、体を包んでいた亜麻布が置いてあるのを見て、やがて帰

って行きました。

しかしマグダラのマリアは墓の外に立って泣いていました。今さらいったいどこに行く所があるでしょうか。自分の唯一の希望であるイエスが殺されて死に、しかもそのご遺体がなくなってしまった。彼女は泣きながらここに立ち続けるほかはありません。

泣きながら、もう一度身をかがめて墓の中を見ると、白い衣を着た二人の天使が見えました。

「天使たちが、『女よ、なぜ泣いているのか』と言うと、マリアは言った。『誰かが私の主を取り去りました。どこに置いたのか、分かりません。』」ヨハネ 20:13

ここで彼女が「(誰かが) **私の主**（を取り去りました)」と言っているのが印象的です。彼女はイエスを**「私の主」**として慕っているのです。わたしたちにとってもそうです。主イエスは「わたしたちの主」であるだけでなく、わたし個人の主、皆さん一人ひとりの**「わたしの主」**なのです。

「こう言って後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。イエスは言われた。『女よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか。』マリアは、園の番人だと思って言った。『あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、

おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります。』」

ヨハネ 20:14-15

そのときイエスが**「マリア！」**と呼びかけました。彼女は振り向いて、**「ラボニ」**と言いました。「先生」という意味です。わたしを呼ぶなつかしい声。

彼女はどんなに驚いたことでしょう。どんなにうれしかったでしょう。もう二度と会えないと思ったのに、亡骸のイエスを探していたのに、今は生きておられるイエスを見ています。彼女はイエスにすがりつきます。悲しみの涙は今は喜びの涙です。イエスが生きておられる。この目で、この耳で、この手で、はっきりと確かめたのです。

「もうそれ以上、わたしにすがりつくのはよしなさい」とイエスは微笑みながら言われました。

マグダラのマリアは、イエスが言われたとおり弟子たちのところに行って言います。

「マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、『わたしは主を見ました』と告げ、また、主から言われたことを伝えた。」

ヨハネ 20:18

「わたしは主を見ました」

これは単なる報告やつぶやきではありません。聖書的に言え

ば**「証言」**というものです。

「わたしは主を見ました」

これはもう事実ですから、彼女の言わば命となった現実ですから、あいまいにすることはできません。

イエスを見たこの目は今もありありとイエスを見ており、イエスの声を聞いたこの耳は今もイエスの声を聞いており、イエスに触れたこの手は今もイエスを感じている。イエスがおられる、生きておられるという事実。その感動が自分の全身を包み、心が燃えているのです。どうしてこれを伝えずにいられるでしょうか。何日経っても何年経っても、何千年経っても、マグダラのマリアは証言し続けるのです。

「わたしは主を見ました」

彼女は、わたしたちに向かっても呼びかけています。

「わたしは主を見ました」

キリスト教信仰にとって大事なことの一つは、この**「証言」**です。わたしはまだよく理解しておらず、経験してもいないかもしれません。けれども「わたしは主を見ました」と証言する彼女に耳を傾ける。彼女の言葉には彼女の真実と命がかかっているのです。聖書はこのような証言に満ちています。

おとめマリアは**「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」**（ルカ 1:47）と歌います。わたしはそんなことは知らないと言って遠ざけるのではなく、マリアのその喜びと賛美に近づ

いて触れてみたいと願う。

たとえまだわたしが経験していないとしても、彼女らが証言する神の愛、イエスの力は、わたしたちにも働きかけています。そしてそれがほんとうにそうだと分かる。それがわたしにとっての力となり、喜びとなり命となる。それをさせてくださるのは聖霊です。

「わたしは主を見ました」

主イエスは復活して、生きておられる。2000 年の隔てを超えて、マグダラのマリアの証言がわたしたちの心に宿り、わたしたちの現実となりますように。

祈ります。

主イエスさま、復活されたあなたがマグダラのマリアに現れてご自身を示し、彼女の名を呼ばれたように、わたしたちにもご自身を示し、わたしたちの名を呼んでください。わたしたちを迷いや疑いや無関心の中に放置せず、あなたが復活して今も生きておられることを教えてください。尊いあなたのみ名を賛美します。アーメン